資料で旅する仙台藩の「道」

二口街道

仙台市博物館　学芸企画室　菅原　美咲

第9回

峠道と境目

江戸時代、奥羽山脈を隔てて出羽国と接していた仙台藩は、出羽国へ抜ける街道の多くが山間地に位置していました。それらの街道の一つである二口街道（二口越え最上街道）は二口峠を越えて仙台城下と山形盆地をつなぐ最短の道でした。街道は物資の流通をはじめ、山寺（立石寺）や出羽三山への参詣の道として様々な人びとが行き交いました。

仙台城下から二口峠に至る道筋は、名取川に沿って長町から鈎取宿・茂庭宿・湯本村・長袋宿・馬場宿（いずれも太白区）を経て野尻宿に至る道と、愛子村や熊ヶ根村（いずれも青葉区）から長袋宿や馬場宿を経て野尻宿へ至る道がありました。野尻宿には人や荷物の往来を監視する仙台藩の境目番所がありました。境目番所は藩内に入る旅人に「通判」と呼ばれる通行証を発行したり、藩外への輸出が規制されている品物の監視をするなどの職務を担っていました。野尻宿を峠に向かって進むと万次岩（現在の磐司岩）と呼ばれる岩壁が両側に現れます。その先の仙台藩の境界には「境目守」の屋敷が道をはさんで二軒ありました。道には門があり、藩境の監視を行っていました。境目守の屋敷から先は山伏峠を通り、山寺馬形村（山形市山寺）に至る道と、清水峠から高野村（山形市高沢）に至る二つの道があったことが「二口」の由来と言われます。

峠の慣習

二口街道では、仙台城下の肴町から出荷された五十集物（海産物）などが山形へ向けて多く運ばれました。しかし山伏峠・清水峠とも険しい山道が続くため、馬での通行ができず、特に積雪が多い冬期の通行は厳しいものでした。そのため、峠の荷物の運搬は背負子が担いました。仙台藩側では野尻宿から境目守屋敷まで荷継を行います。その先は出羽側の馬形村と高野村の背負子が境目守屋敷まで荷を迎えにきて、荷継をしました。通常、江戸時代の荷継は、荷物を受けた宿場の人足が次の宿場まで運びます。二口街道の荷迎えは自然条件を反映した峠ならではの慣習といえるでしょう。この荷継をめぐっては、峠が低い馬形村経由のほうが迅速に輸送できるため、荷継が馬形村に偏り、高野村の生計が成り立たないとして、荷継を高野村にもするよう紛争がおきました。この争いは依頼主である仙台城下の商人の意向や、荷継に関係する三村（馬形・高野・野尻）の意向も絡んで複雑化し、その調停には幕府も関わりました。

明治時代以降の二口街道

明治六年（一八七三）、野尻宿から先の二口街道は民間による道路改修が行われ、馬での峠越えが可能になりました。現在は、江戸時代の二口街道の道とは異なりますが二口林道として全面舗装され、期間限定で車での通行もできるようになりました。磐司岩や白糸の滝などの豊かな自然景観や歴史を求め、往事をしのびつつ、峠を越えてみるのもよいかもしれません。

朱線が二口街道を示し、写真左側で二本に分かれているのが見える。
仙台藩村分絵図（部分）　仙台市博物館蔵

※古代エジプト展の会期中、常設展は開催しておりません。常設展は、9月7日(火)より再開いたします。

2021年7月9日[金]－9月5日[日]

(背景)パディコンスの『死者の書』(左から)パネシィの外棺、ホルの外棺、アメンヘテプのミイラ覆い　いずれも部分　※所蔵はすべてライデン国立古代博物館
All Images ©Rijksmuseum van Oudheden (Leiden, the Netherlands)

仙台市博物館 SENDAI CITY MUSEUM
▶8月の休館日　毎週月曜日(8月9日は開館)、8月10日(火)　▶開館時間　9:00～16:45、土曜日9:00～18:30(入館は全日閉館の30分前まで)
▶博物館ホームページ　仙台市博物館　検索　※開館状況など最新の情報は、博物館ホームページをご覧ください。
▶博物館ツイッター　@sendai_shihaku　〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉　TEL:022-225-3074